



高層マンションの建設現場でコテを手に

建物の壁や床、塀などを仕上げていく左官職人。専用の道具“コテ”に材料をのせ、鮮やかな手つきで塗り壁をする姿はアーティストのようです。1941年創業の中屋敷左官工業(株)は、動画を活用した独自の教育カリキュラムを開発し、若手職人の人材育成で注目されている存在。2013年春に入社した藤木翔希さんは、16年に技能五輪全国大会の左官部門で銀メダルを受賞しており、同社の若手職人は着実に力を付けてきています。「モデリング」で育った藤木さんに会いに行ってきました。

## 入社試験でモデリングを体験

「モデリング」とは、高い技能を持つ左官職人の塗り壁の作業風景を映像で記録し、その映像を忠実に模倣することで技術を体得させる手法。自分が作業する姿も撮影し、違いを確認しながら修正を図り、技能を高めていきます。中屋敷剛社長が考案し、2011年から本格的に導入されるようになり、習得に3年はかかる技

術を1年で身につけることができるようになったと言います。

藤木さんの入社試験ではモデリングが導入され、映像を見て塗り壁を体験しました。「映像を見て同じように壁を塗って、2時間で何となく形になるくらいまではできました。見た目は難しそうでしたが、自分にもできると思いました」と藤木さん。函館の工業高校で建築を学び、就職先を決めるときに思い浮かんだのが、テレビで見た左官の仕事だったそうです。

2012年度に中屋敷左官工業では、企業理念や人材育成の方法、仕事や会社のこだわりなどを紹介したパンフレットを作成し、道内の工業高校に送付したところ8人もの応募がありました。藤木さんはじめ採用した6人は、いずれも離職することなく頑張っています。「同期がいなかったら、もしかしたら辞めていたかもしれないと思うくらい心の支えになっています。何でも話せることがいいですね」と仲間の存在が、大きな力になっているようです。

### 挑戦することが、技術と会社の価値の向上に

藤木さんは2016年に23歳以下を対象にした技能五輪全国大会の左官部門に出場し、銀メダルを獲得。優勝者とはわずか1点差の僅差でした。「若いうちに挑戦できることは何でも挑戦したかった。この年は国際大会の予選も兼ねていたので、どうせやるなら世界を目指そうと思いました」。中屋敷社長が自らトレーニングを指導し、「毎日、本番を想定した緊張感のある練習で、精神的にいいトレーニングになりました」と言います。金メダルは逃がしましたが、「自分ができることをやり切って、過去一番の出来だったので悔いはありません」と達成感があつたようです。「技能五輪後は、工夫の仕方や道具の選び方など、仕事に対する考え方が変わったような気がします」と、その後の変化を語ります。

2017年9月に開催された全国左官技能競技大会でも中屋敷左官工業の中堅社員が出場し、4位に入賞。北海道勢としては10年ぶりの入賞を果たしました。「職人の技能を高めることが、会社の価値を高めることにつながります。全国レベルの大会に挑戦することが学びと成長になって、そこから全体のレベルアップが図られます。本人のやる気があってこそですが、技能向上のためにはお金も時間も投資します」と中屋敷社長。職人たちがその思いをしっかりと受け止めて、成長していることを結果が証明しています。

### 次の時代を担う、職人として

2017年8月下旬から、藤木さんは札幌市西区の高層マンションの現場に入っています。大きな現場は初めての経験。また、左官職人のリーダーとなる職長としても初めての現場です。多い日は約10人の左官職人が現場入りし、その日の仕事の分担や段取りを指示しながら、自身も作業をこなします。他社も含めて20代から60代までの職人がいるので、先輩職人にも指示を出さなければいけません。「誰にどの仕事を担当してもらうのか、どんな段取りが必要かを考えることは大変です。毎日不安でいっぱいですが、先輩にアドバイス

をもらいながら頑張っています。職長は自分の性格に向いていないと思いますが、何でも経験しなければいけないと思っています」。チャンスを逃さず、できることには何でも挑戦してステップアップを図っていくという向上心が感じられます。

中屋敷左官工業では、藤木さんの世代から毎年高卒の新入社員が入社しており、現在の平均年齢は41歳。新年度に新入社員が入ってくると39歳と30代に突入します。20代の社員数が最も多くなり、藤木さんをはじめとする5年生社員は、次の時代を背負っていく世代になります。「先輩たちに教えてもらえるときにいろいろな知識と技術を教わって、それを下の世代に伝えていきたい」と、自分の役割をしっかりと認識しているようです。

中屋敷左官工業は、日経BP社が主催する第3回「日経トップリーダー・人づくり大賞」で最優秀賞を受賞しています。動画による左官職人の人材育成により育成期間の短縮、生産性向上と若手の雇用促進を図ったことが評価されました。「若い世代の価値観に合わせて私たちが変化したということです。6人を採用したときに、私も彼らから勉強させてもらいました。彼らは生徒であり、私の先生でもあった」と中屋敷社長は言います。

最後に藤木さんの夢を聞いてみました。「どんな要請がきても、何にでも対応できる職人になって、たくさんの人から信頼される職人になりたい」。きっとその夢はかなうと信じています。



左官の仕事は壁のイメージがあるが、床も左官職人の仕事